

る（『日本近世近代仏教史の研究』平楽寺書店、一九六九年、三八三頁）。

ただし、キリスト教をも含めた「信教の自由」が明治憲法によって保証されると、井上円了のような仏教者はそれまでの形でキリスト教批判を離れ、「公認教制」の必要性を唱えるようになる——あるいは換言すれば、「公認教」という用語の下で、間接的なキリスト教批判を展開し続けるのである。円了が著した『日本政教論』（一八八九年九月）の検討を通して理解できるように、公認教運動はそれまでの「排耶論」のレトリックに変化をもたらしたばかりでなく、そこから立憲国家の枠組において自己を語り直そうとする仏教者の姿も窺えるのである。つまり、公認運動の枠組にみられるようなキリスト教批判は、日本国家の特徴を考えた、かつ国際法を踏まえたものであり、円了の『真理金針』（一八八六—八七年）に見られたような本質的な批判——「耶蘇教」の創造説に対する仏教的唯心論の論理的優越性や、「情感のみの宗教」である「耶蘇教」に対する「智力情感両全の宗教」である仏教の完全性の宣揚——は、姿を消していることが分かる。

「公認教」は、少なくとも一九〇〇年の宗教法案が否決される時期まで、「仏教と国家」を語るための基本的な理念となり、「文明」をキーワードとするような日本仏教論が「国体」をキーワードとするそれへと展開する時期として把握することが出来る。公認教言説はこうして、近代日本の「仏教と政治のインターフェイス」を捉え直す上での重要な課題として、今後の研究を期待したい。

## 仏の語り方の近代

——近角常観を中心として——

碧海 寿 広

近代仏教研究の古典的な物語、それは、仏教がいかに近代化に成功（失敗）してきたかを問うことであり、近代化をうけつつ近代化に収斂することなく、緊張関係を維持しながら生まれてくる「仏教」に関しては、いまだ十分な議論がなされていないと思われる。本報告では、仏教と近代化の関係を再検討するために、しばしば日本の近代仏教の完成期とされる明治後期の「仏」言説を対象化し、その構造を分析する。

明治も後半期にいたって「仏」を語る場合、自然主義的リアリズムにのっとり人間としての「仏」を語るか、あるいはその客観主義的な論法との棲み分けにおいて、主観的な次元で理念的に抽象化された「仏」（無限）を語ることが、知的な仏教（学）サークルでの基本的なルールとなっていた。前者は村上専精の史学的な仏陀論に、後者は清澤満之の哲学的・精神修養的な真宗仏教論に代表される。

当時の青年知識人に支持された真宗大谷派僧侶、近角常観（一八七〇—一九四一）は、そうしたルールからは少し外れた「仏」の語り方を示した。それは、身近に感じることでできる霊的存在としての「仏」が、ひとつの「人格」として自己に迫ってくることで、人間は知的で道徳的な生き方を選び取るようになる、といったような語りであった。そこには前近代から引き継がれた一定の神秘性を有する「仏」観が色濃くみられる

一方、「人格」としての「仏」という、近代的な論理もまた明確に内包されていた。

「人格」という概念は、明治二〇年代に翻訳語として定着するが、三〇年代になるとこれが宗教界にも広く浸透し始めた。その典型が、徳の高い「人格」を得るために学ぶべき宗教という語りだが、そうした言説のバリエーションのひとつとして、「仏」こそが理想の「人格」を体現した存在である、といった論法をとる者が少なからずいた。仏教界でも突出した人格者として知られた近角は、その代表的な語り手であった。

日本の近代化の一側面として、仏教が公教育の場から脱落していったという経緯があるが、そこで落ちていったような仏教に対するニーズを、別のかたちで満たすことに成功した一連の宗教運動・言説があった。哲学や歴史学といった近代知のフィリターを前提としつつ、だがそこを通過しきれぬ、しばしば神秘の色彩をともしう超越性をおびた仏教が、公教育とは異なる場で語られていたのである。ただし、それは他方で同時に、公教育で認められた社会・国家的な道徳とも矛盾しないかたちで、あるいはそれを補完するかたちで説かれる必要があった。近角が説いたような「人格」を強調する「仏(教)」の語りは、そうした要請にかなった仏教論であったといえるだろう。

この「人格の仏教」の展開は、従来から「実存的宗教言説」や「仏教(界)の教養化」といった近代宗教論の枠組みで研究されてきた宗教言説・運動の領域に属している。しかし、そうした先行研究のフレームにおいては、近角の提示したような、近代教養にも適合的でありながら、なお近代知には収まりきらな

いような宗教の語りを十分に把握しそこねてきた。伝統宗門に由来する信仰の影響という、日本の仏教をとりまく歴史・社会的な背景についても軽視されてきた。

「人格の仏教」の精神史を緻密に跡づけ、理解することは、仏教の「近代化」(脱神秘化、学問化、国民道徳への同化など)とその「残余」(神秘的宗教性や伝統宗門の力など)の相互作用を読み解くという、近代仏教研究のいまだ十分になしえていない重要な課題を達成するための、ひとつの有効な方法となりえるだろう。

## パネルの主旨とまとめ

オリオン・クラウタウ

日本の近代仏教研究の「三柱」、すなわち吉田久一(一九一五―二〇〇五)、柏原祐泉(一九一六―二〇〇二)、池田英俊(一九二九―二〇〇四)らが形成してきた近代仏教史の学説やイメージは、現在、大きく塗り替えられようとしている。ここでは、末木文美士、林淳、吉永進一、大谷栄一らによってとくに二〇〇〇年代から意欲的に提示されている新しい研究内容や枠組みの影響が大きい。本パネルは、そうした先行世代の影響を強くうけた後続の世代に属する報告者たちが、既存の研究では注目されることが少なかったテーマに焦点を当て、従来にならぬ視点から検討することで、この刷新的な動向をさらに押し進めることを目指した。また、現在の近代仏教研究のキーワード